学生生活を振り返って

京都大学公共政策大学院十三期　櫻本　航

子曰、中庸之爲徳也、其至矣乎、民鮮久矣

子の曰わく、中庸の徳たるや、其れ至れるかな。民鮮なきこと久し。

『論語』巻第三　雍也第六

（読み下しは金谷治訳注『論語』岩波書店）

文章を書くときは筋が通っている方が読みやすい。そのため「学生生活を振り返って」というようなタイトルのエッセイだと、何かしらの首尾一貫した目標に突き動かされて行動しているような書き方にどうしてもなってしまいがちである。しかし、私の大学生活は必ずしもそのようなものではなかったことはあらかじめ明言しておきたい。以前、修士一回生のときに、ある就活企業の学生チューターから「君はこれといった目的意識もなく自分が好きなことを勉強しているだけじゃないの」というようなことを言われた。気に食わない言い草だったが、半分くらいはその通りだな、と思った。

実を言うと、私が大学院進学を決めたときにそれほど確固たる動機があったわけではない。とりあえずの希望進路としては国家公務員を考えていたのだが、それまで漫然とした大学生活を送ってきて何も知らない自分が社会に貢献できるとも思えず、もう二年勉強すれば多少はましになるだろうと考えたのがきっかけだった。そういうわけで、その時々で自分自身が深く考えていたとは言えないことも多い。それでも、就職活動を経験したり、自主活動の公共政策大学院交流会で活動したりと、自分自身や公共政策大学院について考える機会はいくつかあったので、今の自分の認識を踏まえながら、これまでの大学生活を振り返ってみる。

私が京都大学法学部の二回生だったとき、何となく憲法・民法・刑法の三科目は履修するものだという風潮があったように記憶している。その一方で私は刑法を受講せず、同じ時間に開講されていた待鳥聡史教授の英語の授業を履修していた。そのときに半期をかけて輪読したのはエイミー・ガットマン（Amy Gutmann）とデニス・トンプソン（Dennis Thompson）のThe Spirit of Compromiseという本だった。アメリカ政治において、選挙運動を通じて分極化が進行し、統治に必要な「妥協の精神」が損なわれていることが指摘されていた。現在までの大学生活を思い出したとき、ふとこの授業のことが頭に浮かんだのは、私が公共政策大学院に進学し、勉強してきたことと共通する点があるためかもしれない。

辞書で「公共」という言葉を引いてみると「社会一般。おおやけ。」とある（『広辞苑 第七版』岩波書店）。自分だけに関わる私的なことではなく、不特定多数の相手が存在しているという点が重要なのであろう。不特定多数の相手と関わりを持つ中で、ときには自分とは考えが合わない場合もある。その際に、自分の信じる原理原則を貫いて相手を説得（ないし論破）するという方法も可能である。相手のことを不合理だと馬鹿にして、まともに取り合わないという方法ももしかすると可能かもしれない。しかしながら、「なぜ相手はこう考えているのか」を理解し、自身の考えを相対化した上で、歩み寄れる部分では妥協することが、公共政策を担う者としてより重要なのではないかと私は考えている。

この他者との歩み寄りという点で考えたとき、私には公共政策大学院で学生生活を送ることができて良かったと思える点がいくつかあるのだが、ここではそのうち三つを挙げたい。

第一に、学部時代よりも幅広い学問分野を学べたことである。私自身は大学に入学して以来、政治学に最も関心があり、政治学の立場から物事を考えられるようになりたいと思っている。その一方で、大学院に進学してからは経済学や統計学の基礎を学ぶ機会を得た。これまで自分が専門としていない領域を学ぶことによって、それらで用いられる思考作法やツールに触れることができた。これは自分自身にとって有益なことであろうと考えている。例を挙げるとするならば、一回生の前期で履修したミクロ経済学について言及したい。ミクロ経済学は大学院進学前から履修しようと決めていた科目だった。久しく遠ざかっていた数式のオンパレードと、決して分かりやすいとは言えない授業には苦労したが、勉強時間の多くをこの科目につぎ込んでなんとか単位を取ることができた。今から考えれば、経済学では世界をどのように捉えるのか、ということの一端を知るには役立ったと言えるのではないだろうか。

第二に、議論をする機会を多く与えられたことである。ゼミ形式の授業や自主活動などを通じ、教員や学生と意見を交わす機会は学部時代よりも格段に増えた。ディスカッションというのは相手の考え方を知るためには有用なツールであるように思われる。ディスカッションを行う目的は、口先で他者をやり込める手段を学ぶためではなく、やり取りを通じて他者がその考えに至った思考に触れるためであると考えている。特に実務家教員と議論ができるケース・スタディ科目は、自身の考えを整理しつつ他者との違いを知れる良い機会だった。

第三に、人生の寄り道ができたことである。寄り道というと、「無駄なこと」のようなネガティブな印象もあるが、私はそうではないと思っている。私自身は民間企業に就職を決めた。特に院卒でなければ選べない進路というわけでもなかったし、会社では文系の大学院卒というのは珍しい部類に入る。元々公務員になるつもりで進学して民間企業に就職したのだから、考え方によっては無駄なことをしたと言えるのかもしれない。しかし、複数の進路で迷い、最短距離ではないルートを通ったからこそ、自分自身の生き方を考え、様々な可能性を相対化できるようになったのではないだろうか。

幅広い学問分野を学ぶこと、議論を深めること、自分自身を見つめ直すこと、これらは「なぜ相手はこう考えているのか」を知り、

相手に歩み寄るためには必要なことであり、同時に公共政策大学院で学ぶことの意義の一つだと思われる。

もっとも、相手の立場を理解して妥協点を見つけることは、そう簡単ではないし、大学院のカリキュラムを修めれば自動的に身につくというものでもない。なぜならば、答えが一意に定まる原理原則とは異なり、妥協には無限のグラデーションが存在するからである。異なる意見を単純に足して二で割れば解決策が出てくるわけではなく、どちらも中途半端で失敗に終わるということが往々にしてありうる。妥協をしようとすると、正解が一つに決まらない中で、最善の方策を探し続けなければならない。さらに、仮にある点で歩み寄ったとしても、なぜ「その点で」「その分だけ」歩み寄ったのかを説明することはさらに難しい。妥協案が両極端の立場からそれぞれ批判を受けることもしばしばある。

人々は往々にして分かりやすい構図を好み、怪しげな「正解」に飛びついてしまうことも多い。単純明快な善悪二元論に立脚し、過激な発言で多くの有権者からの支持を集めるいわゆるポピュリズム政治の広がりも、このような妥協の難しさと関係していると言えるのではないだろうか。

妥協は難しい。しかし、評論家ぶって「世の中には様々な価値観が存在しますね」と単に現状を叙述するだけでは、社会問題の改善には繋がらない。政策を実行するためには、何らかの形で結論を出さなければならない。そう考えると、妥協することは決して易きに流れるということを意味しない。むしろ、「妥協の精神」を発揮し、極端に走らない中庸を求めるためには、不断の努力と強い覚悟が必要とされると言うべきだろう。公共政策大学院を修了した者として、進んで困難な妥協のあり方を追求したい。これが、現時点で大学生活を振り返った上で、ひとまずの私の目標である。